

# 中山間地域における転作実施に着目した地域内“水田団地ゾーニング”の提案 Proposition about “Zoning of the united paddy field”, resulting in the efficient conversion of crops in the mountainous area

○武山絵美 高橋 強  
○TAKEYAMA Emi, TAKAHASHI Tsuyoshi

## 1. 研究の背景と目的

1970年以來、30年以上にわたりコメの生産調整が実施されてきたが、2002年11月末、2010年を目標として国が行う生産調整を廃止することが決定された。しかし、水田を多様な方法で利用していかなければいけない状況は今後も変わらないため、各地域が基盤条件を分析・評価し、それに応じた「水田利用計画」を策定することが求められる。そこで本研究では、水田団地の特性に応じた水田利用方法や圃場整備内容を明らかにし、“水田団地ゾーニング”を提案するものである。なお、本研究では、アザ名を同じにする水田の集まりを水田団地とする。

## 2. 生産調整実施状況と水田団地特性との関連性

生産調整実施状況と水田団地特性との関連性を明らかにするために、京都府下4地区（中山間地域）で現地調査を実施した（図1）。平成11年度生産調整実施状況を図2に示す。舞鶴市鹿原地区では「調整水田」、南山城村田山地区では「保安全管理」など「不作付型」による生産調整が目立つ。一方、日吉町殿田地区と美山町大野地区では、労働粗放型作物のブロックローテーションが実施されており、「作付型」による生産調整が目立つ。このように、生産調整実施方法が異なる理由は、水田団地の立地条件等に見いだすことができる。



図1 対象地区の位置  
Fig.1 Location of 4 samples

**2.1 水田団地の規模・分散度** 日吉町殿田地区と南山城村田山地区の規模別水田団地数割合を図3に示す。田山地区では小規模未整備団地が谷間に分散しており、道水路維持管理の困難さが一因となり、団地を単位とした荒廃化が進行している。一方、殿田地区の水田団地は比較的大規模に集積しており、集団的なブロックローテーション実施が見られる。

**2.2 水田団地までの通作距離** 舞鶴市鹿原地区の平成11年度作付状況（図4）を見ると、農業集落からの相対的な位置関係によって水田団地の利用状況が異なることがわかる。近い場所に立地する水田団地では、「作付型」による生産調整が実施されており、特に圃場整備済み区画を仮畦畔によって分割し、家庭菜園として利用するケースが目立つ。一方、遠い場所に立地する水田団地では、水稲作付けの傍らで「不作付型」による生産調整が実施されており、圃場整備済み区画の一部での「部分調整水田」が目立つ。

**2.3 水田団地の圃場整備実施状況** 農業集落から近い水田団地では、圃場整備実施の有無に係わらず家庭菜園としての利用が見られた。圃場整備済み、かつ共同作業が実施される団地では、

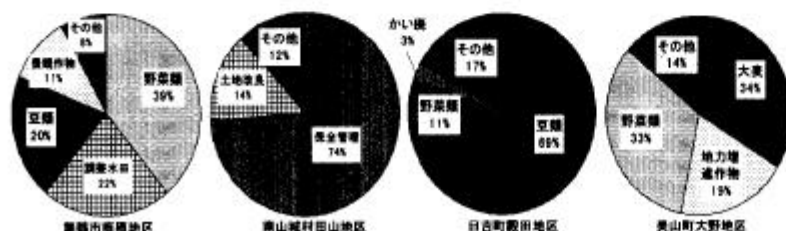


図2 対象地区における生産調整実施状況  
Fig.2 Usage of paddy under the policy of production adjustment

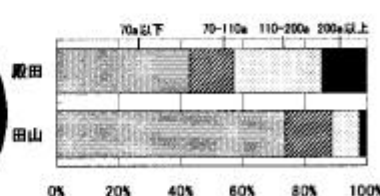


図3 規模別水田団地数割合  
Fig.3 Ratio of the number of united paddy field from the view of scales

労働粗放型作物のブロックローテーションが実施されていた。一方、農業集落から遠い圃場整備済み団地では「調整水田」が多く見られたが、未整備団地では「保全管理」が多く見られた。

**2.4 共同作業体制の有無** 農業集落から近い圃場整備済み団地で、かつ集団営農が実施される場合には、労働粗放型作物のブロックローテーションによる生産調整が実施されていた。この際、作業を請け負う中心的農家の存在や集落内の強い血縁関係が、共同作業体制の維持に大きな貢献を果たしていることがわかった。

さらに、殿田集落の丹波黒大豆のように土地利用型作物に特産品がある場合は、生産量が少なくても販路が確保され、中山間地域のような小規模産地にあっても転作に経済的意義を見いだすことができる。このような販路の確保は、共同作業体制を維持する上で重要なポイントであることがわかった。一方、農業集落から遠い水田団地では、共同作業による営農は見られなかった。中山間地域で共同作業が実施されない場合には、経営規模の小さな農家が独自に生産調整を実施することになることから、特に整備済み区画の場合には、区画の分割による生産調整実施が目立った。

### 3. 考察

4 事例から読みとれる水田団地利用方法の“住み分け”現況に従って、中山間地域における生産調整実施に着目した“水田団地ゾーニング”を表1のように提案する。

表1 中山間地域における“水田団地ゾーニング”のポイント

Table 1 Method of “Zoning of the united paddy field” in the mountainous area

整備距離	圃場整備済み	未整備	圃場整備導入時のポイント
近い	ブロックローテーションによる転作 →転作物物の販路確保等によって集団化を促進する。	農園 →市民・学童農園等 レクリエーション、 学習の場として利用。	大規模未整備団地では、圃場整備により集団転作を促進することが可能。この場合、各地域の経営規模に従って弾力的な水田利用を可能にするために、汎用農地化、適切な区画面積設定等が必要（小区画でも区画間の段差を小さくする方が、作業効率化が図られる可能性がある）。
遠い	主に水稲作付け →団地内一括水管理による用水量削減や作業効率化。	“備蓄水田” →道水路整備により、 粗放の農地管理を可能にする。	大規模未整備団地では、圃場整備によって効率的な農地管理やコメ生産が可能になる。この際、汎用農地化よりも、むしろ団地全体での水管理効率化等が重要。

中山間地域において、地区が各々所有する水田団地の特性を評価し“水田団地ゾーニング”を実施すれば、各団地の機能に応じた利用方法が明確化され、さらに効率的な圃場整備が可能になるという効果が期待できる。また、“水田団地ゾーニング”による集団的農地利用が実現されれば、小規模な中山間地域農家でも生産調整を実施しながら毎年水稲作付け機会を得ることが可能になる。さらに、“備蓄水田”を明確にゾーニングすることで、農地管理意義の明確化と作業の効率化が図られる。

本研究の今後の課題は、“水田団地ゾーニング”の意義をさらに明確にするとともに、その効果を現場において検証することである。また、地区内水田利用の集団化を図るためのソフト面での対策についても研究成果を重ねていきたいと考えている。

謝辞：現地調査にあたっては、舞鶴市、南山城村、日吉町、美山町の担当者の方々にご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。ありがとうございました。



図4 平成11年度生産調整実施状況(鹿原)

Fig.4 Usage of paddy under the policy of production adjustment (in Kawara, 1999)